

## 著者による書籍紹介

### 『中東近現代史』

若林啓史著、知泉書館 2021年6月30日 新書版 828頁、5940円

#### 後記（本書より引用）

本書は、著者の前二著（『シリアの悲嘆』、『聖像画論争とイスラーム』）とは多少異なり、本人の関心に従って構想されたというより、当時の勤務先であった東北大学における需要に応じて、書き始められた。東北大学に公共政策大学院が設置され、中央省庁から常時数人が「実務家教員」として出向していた。外務省からは一名が国際担当として在籍しており、私は偶然の事情で、その何代目かに充てられたのであった。公共政策大学院での主要な教育は、少人数を対象とした演習形式で行われる。これに加え、実務家教員の慣例として、専門に手がけた業務分野を中心に、講義形式の授業を担当することになった。準備期間が限定されたこともあり、実務で得られた知見を伝達するのであれば、私の場合、中東の日本大使館を渡り歩いた経験に基づいて話す以外の選択はないと思われた。自己を空しくして需要に基づいた活動に従事するのは公僕の本分であり、私もそれまで、警察組織を含めた職場で様々な鋳型に嵌められてきた。よって、大学で中東の講義を行うのは、容易な任務と感じられた。2017年2月に開講科目的登録を行い、新年度の前期から授業開始という計画であった。4月開講に間に合わせるため、正月より講義案の執筆に取りかかった。講義案という発想が生じたのは、私が学生だった頃、法学部の講義は原稿が用いられたような印象を受けたからである。もちろん、実務家教員の授業は、本来原稿も記録も必要なく、実務の雰囲気を生き生きと学生に伝え、公務員の仕事に興味を持ってもらえば十分と承知していた。また最近では、高等教育における教員の教育技術向上が強調されている。私の研究室の備品であった市販の授業指南書では、学生の関心を喚起するため画像・映像教材の作成に加え、授業を話芸として完成させる努力が必要とされていた。講義案の作成は、おそらく時代錯誤の着想だったのだろう。それでも授業内容の原稿化を始めたのは、知ったつりになっている事項に論理の骨格を与えることが本人にとって有用であり、また文章にしておけば、授業に参加しない人々にも、いずれ役に立つだろうと考えたからである。

ところが、実際に書き始めてみると、これが予想をはるかに上回る遠大な事業であることに気付いた。例えば、本書第1章で扱った中東世界の概要について、中東に関わる人には常識である事項も、一つ一つ順序よく記述するには、かなりの根気を要したのである。本書全体の方針として、既存の要約の借用は避けたいと考えたため、結果的に似たようなものができるのは仕方ないとして、できる限り素材に遡ろうとした。そのため、中東には高い山があるという指摘に際しては、中東のめぼしい山はどこにあるか、一応点検する必要が生じる。イランやトルコ、レバノン、オマーン内陸に結構な山があるのは肉眼で見ていたが、アフガニスタンやマグリブ地域ではどうかというと、資料を捜さなければならない。山はないはずだと思われた地域に、ないことを確認するのも一苦労である。地図帳の色分けぐらいを信用していると、足元をすくわれる危険がある。さらにこれらの山々の標高に触れる場合は、一、二時間費やす調査が発生する。イラクやイエメンにも相当高い山があることを発見し、感心しているうちに一日が終わってしまう。民族や言語の記述に移ると、信頼できる研究に頼らなければならぬ。

ればならない。読者の中には専門家が混じっていると予測され、どの文献が無難か迷いながら調べることになる。そのようにして第1章は一通り書いたが、終わってみると2月末になっていた。第2章以降も、同様の状況であった。漠然とした事前の知識には、霜降り状の欠点が明らかになり、これらを解消する作業に手間取った。執筆中に関心が主題から逸脱して道草を喰い、認識や評価の修正が発生すると、以前の記述に遡って見直しを迫られる。これはこれで、本人の知識の再構成には有効であるが、一方で開講の日が迫ってくる。授業が始まると、講義案の蓄積は急速に減っていった。ついに一週間で書いた分を講義し、すぐ翌週の分に取りかかる、線路を敷きながら走行する状態に陥った。学期末まで、何とか講義案は書き続けたが、それで本書全体の3分の1であった。いにしえのイスラーム世界の大学者は、原稿なしに毎日滔々と講義し、弟子が一定期間筆記した文章が、首尾一貫した書物に仕上がっていたというが、実力の格差を思い知らされた。

大学での授業に一区切りつくと、前著『シリアの悲嘆』の原稿を、2019年度の日本学術振興会出版助成に応募しようと考えた。前著は、刊行時に900ページを超える分量であった。出版と併行して、前著の原稿に加筆した論文を京都大学の学位審査に付した。これらが終了して、再び『中東近現代史』に手をつける余裕が生じた。その間、2019年夏には東北大学への出向期間が終了し、同時に33年にわたった外務省勤務からも退いた。本書第三部「中東問題の現代的拡大」で扱った、湾岸戦争から「アラブの春」までの時代は、私が中東で勤務した時期に重なっている。その間の出来事について大量の出版物はあるが、現場から見れば多少の異論が生ずるし、史料と見比べれば、自分の認識を修正しなければならないこともある。そこで、仙台から東京に引き揚げた機会に、『中東近現代史』を完成させ、今度は社会の需要に応ずることができればと願った次第である。

本書の刊行が具体化する中、私は学生時代から今日まで学恩を受けている板垣雄三・東京大学名誉教授と樋口陽一・東京大学名誉教授に、それぞれ一文を頂戴したいと願い出た。それは後学である著者が、名家の序跋を自著に乞う東洋の伝統を踏襲し、より現実的には、私を知らない一般読者に対し、最良の読み手である両教授の言葉が紹介状になるよう希望したからである。板垣教授は、本書の原稿を詳細に眼を通して下さり、全章について構成から用語に及ぶ懇切な示唆を頂いた。樋口教授は2016年、中東を主題とした勉強会に私を招待下さり、中東近現代について再考する機縁を賜った。2017年および2018年、両教授が参加された「放談会」形式の会合が松本と仙台で開催され、学問分野を超越した知的饗宴の場が実現したことは、東北大学勤務のまたとない記念であった。本書がこのようにして形を成したのは、両教授による鞭撻の賜と改めて感謝の念を表したい。本書出版にあたっては、前二著と同じく知泉書館・小山光夫社長より理解と激励を頂いた。前著に続き本書の編集を担当された松田真理子氏共々、適切な助言と惜しみない協力が得られ、無事刊行を迎えたのは、著者にとって大きな喜びである。

2021年3月

若林 啓史（博士（地域研究）：京都大学）

## 『中東近現代史』目次

### 凡例

本書刊行に寄せる言葉（板垣雄三）

### 自序

### 地図

## 口絵出典一覧

### 第Ⅰ部

#### 植民地体制下での中東世界の形成と展開

##### 第1章 中東の与件

- 1 定義
- 2 地理
- 3 民族
- 4 言語
- 5 宗教

##### 第2章 オスマン帝国とペルシア帝国

- 1 両帝国の起源
- 2 オスマン帝国の成立と発展
- 3 ペルシア諸王朝の興亡
- 4 オスマン帝国の近代化と衰亡

##### 第3章 東方問題とナショナリズムの萌芽

- 1 東方問題
- 2 東方問題の操作
- 3 統合理念の模索
- 4 国民国家への分割と封入

##### 第4章 サイクス・ピコからサン・レモまで

- 1 将来構想
- 2 シオニズムとワッハーブ派
- 3 秘密外交
- 4 國際的決着

##### 第5章 英仏委任統治とその終焉

- 1 エジプト・スーダン
- 2 マグリブ
- 3 歴史的シリア
- 4 イラク・アラビア半島

### 第Ⅱ部

#### 冷戦体制下でのナショナリズムの成長と挑戦

##### 第6章 アラブ・ナショナリズムの高揚

- 1 第二次世界大戦前後
- 2 第一次中東戦争
- 3 エジプト革命とその影響
- 4 マグリブ諸国の独立

## 第7章 トルコ共和国とイラン王国

- 1 トルコ共和国の誕生
- 2 パフラヴィー朝の成立
- 3 トルコ内外政の模索
- 4 パフラヴィー朝イラン
- 5 対比の視角

## 第8章 第三次中東戦争

- 1 汎アラブ主義の形成と後退
- 2 イスラエルとパレスティナ
- 3 六日戦争
- 4 「ナクサ」の余波

## 第9章 第四次中東戦争とキャンプ・デイヴィッド合意

- 1 アラブ諸国の再建
- 2 第四次中東戦争
- 3 キャンプ・デイヴィッド合意
- 4 レバノン内戦

## 第10章 イラン革命とイラン・イラク戦争

- 1 白色革命
- 2 イスラーム革命と権力闘争
- 3 イラン・イラク戦争
- 4 ハーメネイー時代

## 第Ⅲ部

### 中東問題の現代的拡大

## 第11章 湾岸戦争

- 1 クウェイト侵攻への道
- 2 湾岸危機
- 3 湾岸戦争
- 4 停戦後のイラク

## 第12章 中東和平交渉とその挫折

- 1 マドリード会議
- 2 オスロ合意
- 3 交渉の暗転と停滞
- 4 第二次インティファーダ以後

### 第13章 対テロ戦争の時代

- 1 アフガニスタンとカーヤイダ組織
- 2 「不朽の自由」作戦
- 3 「イラクの自由」作戦
- 4 撤退戦略への転換

### 第14章 2011年以降の混迷：アラブ世界

- 1 北アフリカの政変
- 2 シリア「内戦」
- 3 「イスラーム国」の跳梁と衰退
- 4 アラビア半島諸国の異変

### 第15章 2011年以降の混迷：非アラブ諸国

- 1 トルコの変貌
- 2 拡大するイランの影
- 3 イスラエルとパレスティナ問題
- 4 大国の役割

### 終章 中東の将来

跋文（樋口陽一）

後記

参考文献

年表

人名索引

事項索引